



古
新
舜

あ
ま
の
ざ
わ



ラゲーナ出版

もくじ

あまのがわ

5

対談 ロボットをもう一人の自分として、
新たな関係性をつむぐ

古新舜 × 吉藤オリイ

208

あとながき
217

装画
露草

題字
明石
あおい

プロローグ

「やばっ。風、つよっ！」

海に面した真っ暗な山道に、青年の声が響き渡る。辺りはうっそうとした樹々に囲まれており、ほかに人の姿はない。夜の海風は、春の訪れを裏切るように肌寒い。重たい天体グッズをリュックに詰め込んでいるため、身体に強く吹きつける風にあらがうには、いや応なしに前かがみになってしまう。それでもひるむことなく上へ上へと登り続けた。そこには、彼が長年大切にしてきた一つの想いが存在する。

鹿兒島の離島、種子島。細長い形が特徴的で、延々と続く長いビーチは、年間を通してサーファーたちのメッカにもなっている。

彼は、この島で生まれ育った。父親を早くに亡くし、母親の手によって大切に育てられた。一人ぼっちで過ごすことが多かったが、大きくなるにつれ、頭上に広がる夜空に興味を持つようになった。いつたいどのくらいの時間を使えば、あの星にたどり着けるのだろうか。

種子島は、日本屈指の宇宙研究機関JAXAがあることでも有名だ。彼の天体好きにそれが影響していることは言うまでもない。地元で定期的に打ち上げられるロケットを間近で見るたび

に、宇宙への想いを強めていった。

小学五年生の時、母親にねだって望遠鏡を買ってもらった。高額なものではなかったが、それでもセミプロ仕様の望遠鏡は、十分過ぎるほどの冒険道具だった。そして、毎晩のように天体観測に出かけるようになる。小六までは母親につきそってもらったが、中学生以降は、一人で行くことが日常となった。

高校三年の今、彼にとって宇宙は、遠いようでも一番身近な存在だ。

家から歩いて一時間弱。小高い山の上にたどり着いた。眼下には切り立つ崖とともに、見渡す限り延々と海が広がっている。荒々しく崖に打ちつける波の音がまるで交響曲のように伝わってくる。

腰のベルトの赤色LED懐中電灯を頼りに、慎重にリュックから観測道具を取り出した。青色の断熱マット、迷彩色の折り畳み式チェア、星座アプリ入りタブレット、そして、長年愛用している望遠鏡……。観測の準備をしていると、次第に風が柔らくなってきた。

望遠鏡は、焦点距離が九百ミリ、口径比が一对十二・九。肉眼の約百倍は見える。シングルマザーである母親にとって、この買物物は奮発したものだった。母親は日ごろから、父親のいない息子に対して寂しい思いをさせまいと、人一倍愛情を注いでいた。望遠鏡もその一つの表れだったが、思春期に入った彼にとって、母親のその思いは少しづつ重荷になっていた。

今の季節は、北斗七星と北極星がはっきり見える。裸眼で大まかな位置を確認した後、望遠鏡のファインダーを調節して、北の方に鏡筒を動かすと、柄杓の形をした星座が見える。接眼レ

ンズに目を近づけて観測すると、まばゆい星が姿を見せた。口をあんぐりと開けたまま、独り占めできる宇宙の美しさに魅了された。

北斗七星がおおぐま座の一部だと教わったのは、小四の時。天体には無数の星があり、宇宙は広がり続けていることを知った。この地球上にも、学校では教わっていないたくさんの生命いのちが存在しているのではないか。そんな視点を持っていた彼は、小学校のころは変わり者に映り、周りの子どもたちから敬遠されていた。

しかし、彼は、周囲の視線や風当たりを気にすることなく宇宙の神秘に没頭し、毎日図書館に通いつめては天体図鑑を読み漁っていた。歳を重ねるにつれ、もつと宇宙に近づきたい、宇宙のことをより深く研究したい、そう考えるようになっていった。

気づくと三時間が経っていた。母親との約束で深夜零時までには家に帰るように言われていたが、すでに午後十一時を少し回っている。このままだと門限に遅れてしまう。慌てて観測道具をリュックに押し込んで帰路に向かった。

途中将来のことを考えた。——宇宙のことを専門に学べる学校に進学したい。そのためにこれからは受験勉強に専念しなければならない。あと一年経てばようやく自由の身になれる。そして、宇宙飛行士になる夢を叶えるんだ。

しばらく収まっていた風が突然強く吹きすさんだ。

夜は空がとても澄んでいて、うしかい座としし座の間にあるかみのけ座かみのけがよく見えた。時計の針を見返すたびに、母親の顔が脳裏をよぎる。門限を過ぎて帰宅すると、きまって機嫌が悪く、

翌日の天体観測に支障がでる恐れがある。歩幅を大きく取って速度を上げ、ひたすら下山することに集中した。

長かった林道を抜けると、眼下に自宅の明かりが見える。山道を抜けて集落と山との境目にある車道にたどり着くと、ここから家まで残り五分。時間が気になり何度も腕時計を見返した。

——あと三分。このままならギリギリ間に合うだろう。

スパートした。その時突然、右前方からまばゆい光が覆い包んだ。

思わず光の方に顔を向ける。

「えっ!？」

けたたましいクラクションの音が響き渡る。その直後に鈍い衝突音が辺り一面に広がった。

叫び声とともにけたたましいクラクションの音が空間を占拠し、時間が瞬時にして凍りついた。

青年は道路に物体のように横たわっていた。

近くに転がった懐中電灯は、その無残な光景を延々と照らし続けていた。

見渡すと、鹿児島市内の街並みが広がり、背景には桜島がそびえ立っている。この絶景の中にある坂道が小学校時代の私の通学路だ。坂道を休憩なしに上るのは少しきつかったけれど、慣れ親しんだこの風景が大好きで、いつも鼻歌交じりで駆け上った。

五分ほど道を上ると、焼酎メーカーの大きな看板が見えてくる。その十字路を左に曲がると、威勢のいい太鼓の音が少しずつ大きくなってくる。

鹿児島は、西郷隆盛や桜島、鉄砲やキリスト教伝来など、文化や伝統にあふれている土地。市内から桜島を臨むことができ、街並みと自然が一体化している。そして、近くには錦江湾といわれる湾があり、そこからさまざまな島に行くことができる。鹿児島が抱える島の数は長崎に次いで全国第二位。そんな魅力ある場所です。厄介なのは、桜島から降り注ぐ灰だ。こつちでは灰を「へ」と言うけれど、そのへが断続的に降り注ぎ、洗濯物がしょっちゅう汚れるのだ。

私の家は木造一軒家。おばあちゃんとお母さんと私の三人暮らしだ。お父さんは四年前にこの家を突然出ていった。お母さんに理由を尋ねても、「大人の問題に子どもが首を突っ込まないの」ときまって怒られた。そんなとき、おばあちゃんは後ろからそっと抱きしめてくれた。

本書を購入する



福地桃子主演映画「あまのがわ」の小説化!



吉藤オリイ氏 **感涙!!**

心が自由なら、どこへも行けて、
なんでもできる。

これはフィクションであり、
ノンフィクションの物語だ。

吉藤オリイ (分身ロボット OriHime 開発者)

